

エヴォルブーEvolveー

狼純

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

とある過去に、重大な問題が発生した。

それは未知の生物たちによる惑星アルカディアの侵略だつた。

私たちは彼らに対する対抗手段を持つていたはずだつた。

彼らはそれを上回る力で私たちを圧倒した。

この問題に対処すべく1人の少女が立ち上がつた。

そう、その少女とは末代にまで伝わる伝説の英雄クレメンタイン・イソギリアス。

彼女はタイムマシンであるべき未来を取り戻すために過去に戻つて奴らを倒すこと  
にしたのだ。

しかし、直前の襲撃によりタイムマシンは未来に行ってしまう。  
そんな彼女の英雄譚である。

目

E  
v  
o  
l  
v  
e

i  
s

次

e  
v  
o  
l  
v  
e  
d

1

# E v o l v e   i s   e v o l v e d

少女は日記を書いていた。

ここは人間と妖怪が住んでいる惑星、アルカディア。

まだ銃器などもなく、剣や槍、時には素手で彼らが争っている中、それはやつて來た。

そう、E v o l v eだ。

私たち人間は大司祭ウエンデルのお告げにより奴らが到来することはわかつていた。E v o l v eを倒すには十分と言える大兵力（妖怪側も一時停戦を申し込んだため）で私たちは討伐に向かった：はずだつた。

最初のうちは奴らは弱かつた、ただ動いているだけの肉塊のようだつた。

ただ、ある時を境に奴らは急に姿を変えた。

その肉塊のような姿は人間と同じように人型に、それは妖怪側でも同じことが起つていていた。

妖怪側は自分たちの持つ爪や牙を使い、奴らを圧倒していた。

だが、奴らは進化した。

奴らは自分達の体を妖怪たちの姿形に似せ、模倣した爪や牙で切り裂き、噛み碎いた。

瞬く間に人間側、妖怪側の大兵团はほぼ全滅した。

私はその時の生き残り、クレメンタイン・イソギリアス。

私の所属していた隊も含めてほぼみんな行方不明になつてしまつた。

私は女という理由だけでタイムマシンに乗る権利を得た。

この城塞も今E v o l v eの猛攻を受けている。

殺される前に出発しなければならない。

最後に、戦うことをやめてはならない。

変えられる未来を諦めてはいけない。

この日記が後世に伝わることを祈る。

彼女は書くのを終えた。

そして急ぎタイムマシンに向かつた。

そこにはレバー式のコックピットむき出しの座椅子型タイムマシンといかにも優し

そうな目をした白髪の老人が立つていた。

「もう行くのか？」

ささやくような、それでいて心を奪われる声でクレメンタインに語りかける。

「ええ、E v o l v eの襲撃を受けているから迷っている暇はないわ」

「そうか…ところで何か頼みごとがあるんじやないのかね？」

彼はまるで最初からわかつていたようだつた。

「凄い！・ウエンデル先生つたらなんでもお見通しなのね！私の書いた日記を後世に残して欲しいのよ。もしかしたら、私は時空嵐に迷い込んで死んだ世界が変えられないのかもしれない。でも、この日記を読んで欲しいの。戦うことを諦めて欲しくはないの！」

私は懇願した。

「安心しなさい、わしが絶対に守つてみせる。」

その時扉に大きな衝撃が入る。

「…そろそろ時間切れじゃの。長話してすまんのう。さあ、日記を差し出しなされ。」

私が急いで日記を渡すと、彼は霧のようになつて消えて行つた。

私は急いでタイムマシンに乗り込む。

しかし、一歩遅かつたのか。敵の投げ槍がタイムマシンのレバーに当たつてしまつた。

そのとき運悪く（もう少し遅かつたら弓矢などが飛んで来たかもしれない）本当に悪かつたのかどうかは分からぬが）、ちょうど私は時空転送ボタンを押してしまつたところだつた。

そして私は未来に飛ばされることになる。